挨拶（あいさつ）

あいさつ【挨拶】

この頃はまづ挨拶も寒さかな　示峰[江]
あいさつの一言ひとことおほし後のちの月　素花[江]
あいさつはうちとの風でしまひけり　千代[江]
よろこぶ犬の尾にて挨拶　嘯山[江]
しぐれますと尼僧にそうにあいさつされて居る　放哉
挨拶の傾け合へる日傘かな　温亭
挨拶や髷まげの中より出る霰あられ　漱石
小夜さよしぐれとのゐ申もうしの声遠し　子規
時雨つゝ大原女おはらめ言葉交かわしゆく　虚子
襖ふすま閉とづ儀礼のことば美しく　しづ子
よいお天気の言葉かけあつてゆく　山頭火
お月さまが地蔵さまにお寒くなりました　山頭火
輪を描かくは去いぬる挨拶鶴の群　雀人[八]
わが庭を近道してゆく隣の子行きに戻りに
われに声かく　富永友弘[八]

あくしゅ【握手】

帰路へ握手ゆきぐにの旭ひよふり注げ　さかえ
生別や父と胼ひびの手握り合ひ　あさし[八]
露冷えの握手に指の無い手出す　肇[八]
いくたびの激論の後に諾うべなへる彼の握手
の固きを受くる　佐藤一祥[八]

いとまごい【暇乞】

みじか夜やいとま給たまわる白拍子　蕪村
炉のはたやよべの笑ひがいとまごひ　一茶
髪洗うて温泉ゆにもうたるゝいとま乞ひ　秀野
老僧に通草あけびをもらふ暇乞　子規
かなかなの鳴いて暇を申しけり　兎月[八]
坐を立ちていとま申せば夕日さす立木たちき
にとまり蜩ひぐらし鳴きつ　岡麓

いや・れい【礼】

礼云れいゆうて出れば柳は青かりき　井月
炎天の道に働く男子等おのこにわれひそかな
る礼して通る　岡本かの子
今日までの命とりとめ得ておほかたの人に
礼いや言ふ心すなほに　島田尺草[八]

えしゃく【会釈】

ふらこゝの会釈こぼるゝや高みより　太祇[江]
はつ雪や見しらぬ人に会釈する　舎羅[江]
会釈して行ゆくや牡丹の簾すだれさき　井月
鉢巻をとつて会釈や大根引だいこひき　淡路女
会釈したき夜明の人よ夏柳なつやなぎ　水巴
学童の会釈優しく草紅葉くさもみじ　久女
マスクより会釈あふれて女医やさし　要[八]
門火かどび焚たく人に会釈し路地ろじに抜ける
宗子[八]

おじぎ【お辞儀・お時宜】

顔さげて時宜のふかさやゆりの花　りん[江]
目下にも中ちゅうの詞ことばや年の時宜　孤屋[江]
蟻二疋時宜する花の樗おうちかな　富天[江]
母子おやこで代る代るおぢぎしてお墓　放哉
旅は寒い生徒がお辞儀してくれる　山頭火
走り寄つた青シヤツの朝の若者、雨量計のそ
ばで私に脱帽する　前田夕暮

おはよう【お早う】

ぬかるみで、先生お早うございます　山頭火
お日さま山からのぞいてお早う　山頭火

おやすみなさい【お休みなさい】

松葉ちりしいてゐますお休みなさい　山頭火
露散るやおやすみといふ別れごゑ　しづ子

ぎょけい【御慶】

かつしかや川むかふから御慶いふ　一茶
むく起おきの小便ながら御慶哉　一茶
我顔に御慶申さん初かゞみ[鏡]　梢風[江]
この春を御慶もいはで雪多し　漱石
東海道馬上ばしょうの人の御慶かな　乙字

こんばんは【今晩は】

おしづかなお晩でございますと夜長よながの　素逝
あたたかくこんばんはどんびきがゐる　山頭火

さらば・さようなら

いざさらば蚊遣のがれん虎渓こけいまで　蕪村
鶏にさらば／／と雲雀ひばり哉　一茶
笠でするさらば／／や薄うすがすみ　一茶
なにもかもさらば／／とちる花か　紫白[江]
いざさらば吹き散って見せよ枯尾花　鬼城
水をわたる誰にともなくさやうなら　山頭火
寒い雲のボタ山よさようなら　山頭火

ねんが【年賀】

髻もとりを女房に結ゆはせ年賀かな　鬼城
子等こら残し来て日暮れたる年賀哉　久女
端正たんせいに年賀うけつ、老母かな　碧童
手さぐりの手と手とふれて年賀かな　愛子[八]
乳母車降おりて年賀の客となる　愛子[八]

もくれい【黙礼】

燕つばくらに黙礼もなしわたりどり　涼帝[江]
黙礼の跡あと見かへるや朧月おぼろづき　柳之[江]
黙礼にこまる涼みや石の上　正秀[江]

わかれのことば【別れの言葉】

わかれを云ひて幌をろす白いゆびさき　放哉
秋雨にわかれの言葉まだいはず　多佳子
木の実落つわかれの言葉短かくも　多佳子

愛する

あい【愛】

マスク洩もる愛の言葉の白き息　三鬼
葉の上に滴したたりしもの愛の終止符　しづ子
苗代なわしろは山の日の愛一身に　肇[八]
愛無限あいむげん一葉ひとは々々の色と味　恵哉[八]
不器用に男電話で愛告げる　みつ子[八]
ポストの赤奪いて風は吹きゆけり愛書きて　岸上大作
何失いしわれ　岸上大作
ポストの赤まなぶたふかく埋うずめゆく愛は
ふたたび書かぬ日のため　岸上大作
森に愛埋めに行きし日のアリバイを知る空
青く冬の透明　岸上大作
愛少し賜たまへと乞こひつつ苦しめり気位きぐらい高き乞食こつじきわれは　中城ふみ子
雪の渦うず巻きつつすすむ道に出て無形むぎょうの愛のなにを恃たのまむ　中城ふみ子
児この肉につと歯あつれば全身の愛ぞめさ
むれけもの、如く　今井邦子
崖淵に身を投げ死なむ衝動も我が子の愛に
曳ひかされて断たちき　村山義朗[八]

あいされる【愛される】

松かげの丘のなかばの草に臥ふし思はるゝ
身をやすしと思ふ　百田楓花
わがこころ二つのむねに領りょうぜられめで
つうらみつ苦しき身かな　九条武子
むつかしや何を願へる心ぞや云ふまでもな
し思はるること　与謝野晶子

あいしあう【愛し合う】

かをり寒き梅の林に相恋あいこひし悲しき情こころ語りつくさむ　伊藤左千夫
鎌倉の由比が浜辺の松もきけ君とわれとは
相おもふ人　与謝野晶子
愛し合ふ人らが花を買ひゆくとすれ違ふわ
れは泥濘ぬかるみによく　中城ふみ子
相眠る墓をねがひし愚かさの白しらじらとし
て夜半にさめをり　相良宏

あいする【愛する】

サボテン愛す春暁のミサ修し来て　三鬼
仙人掌サボテンの奇峰きほうを愛す座右かな　鬼城
萩の芽に犬ころ愛す小庭かな　子規
雪の日の少年いつかひと愛さむ　しづ子
抱く子のうぶ毛夕風の柔らかさを愛する　裸木
愛すれば苦しき町とかはりけり空澄める町
にすみかねるなり　小熊秀雄
野いちごの実が紅くれないに熟しゐてひそかに
われは人を愛せり　瑞浪杏子[八]

うつくしむ【美くしむ】

河がらす水食はむ赤き大牛をうつくしむご
と飛びかふ夕ゆうべ　与謝野晶子
川ひとすぢ菜なたね十里じゅうりの宵月夜よいづきょ母がうまれし国美くしむ　与謝野晶子

おもうひと【思う人】

雪解や妹いもが炬燵に足袋片かたシ
思ふ人の側そばへ割込む炬燵こたつ哉　一茶
ひそかにわがおもふひとも菊の客　草城
栗の花ときをり思ふ人もあり　利一
夫つまならぬひとによりそふ青嵐　しづ子
おもふひとに嫁とうぐわが友馬に乗せてくつ
わとる身のあゝ胸さわぐ　山川登美子
つややかに君が髪こそ匂ひぬれ満座まんざの
なかのわが思ふひと　百田楓花
かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふ
ひとの春のまなざし　北原白秋

しのあい【師の愛】

義母ははの愛師の愛君の花差入くれし情こころう
れしと憶おもひ優やさしむ　島秋人
師の愛に心を矯ためて生き来きしに召されし
と知るひと日おくれて　島秋人

ちょう【寵】

寵愛の仔猫の鈴の鳴り通し　虚子
綿虫に天光てんこうの寵暮くるるとも　多佳子
くちなはの口や狐きつねのまなざしや地のう
へ二尺にしゃく君は寵の子　山川登美子

ははのあい【母の愛】

編棒の生み出す形母の情じょう　純夫
小包の中に充みちてる母の愛　月舟[八]
送り来し温石おんじゃく母のこころざし　愛子[八]
母が愛は刃やいばのごときものなりきさなり
いまだにそのごとくあらむ　若山牧水
若き保母ほぼ母亡き幼児の添ひ来るに背をさ
すらせて母情を知らす　島秋人
読難よみにくき片仮名だより母そはの母の情な
さけの溢あふれぬにけり　牧岡秀人[八]
一房ひとふさのぶだうのつぶら実もぎとりて一
つづつ母は握らせてくれぬ　木下喬[八]
小包のかたき結びの細ひもに母の情なさけの
深くこもれり　西広みどり[八]

ふたたびそう【再び添う】

うつしみの老いてふたたび人に副そふ沁沁し
みじみとして生きゆくべしも　津田治子[八]
妻も子も在る人ながら外の世のことと思ひ
て副ひたり吾は　津田治子[八]

間（あいだ）

あい【間】

暑夜あつきよの荷と荷の間に寝たりけり　一茶
とうふ屋と酒屋の間を冬籠ふゆごもり　一茶
菜の花や杉菜の土手のあい〳〵に　長虹[江]
藪垣やぶがきや卒塔婆のあひを飛ぶ蛍　鬼貫[江]

あいだ【間】

話している間へきて猫がうづくまる　山頭火
更ふけると涼しい月がビルの間から　山頭火
なんとなくあるいて墓と墓との間　山頭火
吠える犬吠えない犬の間を通る　山頭火

いしのあい【石の間】石間（いしま）

菊の花咲さくや石屋の石の間　芭蕉
療養や墓ひき去ってゆく石の間　静考[八]
石の間にうろこの匂ひ青みきてどくだみ草　明石海人
もよみがへるなり
石の間に砂をゆるがし湧く水の清すがしきか　斎藤茂吉
なや我は見つるに

いわのあい【岩の間】岩間（いわま）

つゝじ咲さきぬ土に乏しき呂の間　集馬[江]
ひき残る岩間の潮に海ほほづき　久女
蟹かにの目の岩間に窪くぼむ極暑かな　鏡花

かきのひま【垣の隙】

水鳥みずとりや夕日江えに入いる垣のひま　蕪村
行春ゆくはるや白き花見ゆ垣のひま　蕪村
廿日はつか垣結ゆへどもるゝや猫の恋　りん[江]
春立つや坂下見ゆる垣のひま　犀星

かぜのあい【風の間】

梅が香や風のあい〳〵木にもどり　千代[江]
岩山や水仙かをる風の間　露伴

くさのあいだ【草の間】

鬼灯ほおずきや草の間にふと赤し　非群[江]
なでしこや束ねし草の間より　梓雪
月光つき揺れて夏草の間まを流れかな　久女

くもま【雲間】

ほと、ぎす柩ひつぎをつかむ雲間より　蕪村
西の空雲間を染めて赤々と氷こおれる海に日は落ちにけり　石川啄木

このま【木の間】

百景や杉の木の間のいろみぐさ　芭蕉
花ちりてこの間の寺と成なりにけり　蕪村
秋なれや木の間木の間の空の色　也有[江]
春雨や木の間に見ゆる海の道　乙二[江]
木の間の日かき曇くもらして雪しづれ　泊月

このまのつき【木の間の月】

水さえて月も岩もる木のま哉　宗祇
山茶花の木間見せけり後のちの月　蕪村
春月しゅんげつや印金堂の木間より　蕪村
月ひとり柳散り残る木の間より　素堂[江]
清光せいこうの目をあゆませる木間哉　五友[江]
さしのぞく木の間月夜や浮寝鳥　たかし
走馬灯に木の間の月や子等は寝し　久女
のがれ得ぬ死刑と思ひ仰ぐ獄窓まど樹この間
の月の清く更ふけたり　島秋人

すきま【隙間】

旅宿たびやどの雨戸の透すきや朝の霜　周砥[江]
青蟷螂灯に来て隙間だらけの身　多佳子
霜月夜細く細くせし戸の隙に　多佳子
藤房の隙間だらけに入日時いりひどき　多佳子

たにま【谷間】

谷間たにあいの二軒の家のとんどかな　鬼城
熔岩ようがんの谷間文字食くう山羊の夏　三鬼

なみま【波間】

波の間や小貝にまじる萩はぎの塵ちり　芭蕉
波間からぴんと出いでたり浦の玉兎つき　露伴
ちぬ釣のともし灯び見ゆる波間かな　月草[八]
波音の間まに〳〵虫の聞きこえけり　敏夫[八]

はのあいだ【葉の間】葉の隙（ひま）

夏の帯広葉のひまに映り過ぐ　久女
鳥の巣の中よりあふぐ心地しぬ若葉のひま
のいと青きそら　片山広子
松の間まに桜さきたり松の葉の黒きひまよ
りうす紅べにざくら　岡本かの子

ひあわい【庇間】

みぞれふる庇ひさしの間あいや友雀　昌房[江]
庇合ひあわいに一つ見ゆるや冬の星　草城
ひあはひに枇杷の葉青し秋の空　水巴
庇間や奈良の夜ふけに顕たつ影の大きなる
鹿のもそと来てあり　北原白秋

みけん【眉間】

山雀やまがらの眉間の白や秋曇あきくもり　石鼎
眉と眼の間曇りて雪が降る　三鬼

やまあい【山間】

山間の空を嬉しと咲く梅か　乙二[江]
山あひに日のあたりゐるしぐれかな　犀星
秋の水もの悩みしてくもるなり信濃の渋の
山あひに入り　与謝野晶子
上野かみつけの越後にとなる山あひの村は軒ご
とに桐を植ゑたり　若山牧水

やまのかい【山の峡】山峡

山峡をバスゆき去りぬ蕗ふきの薹とう　龍之介
日ざかりや青杉こぞる山の峡　達治
峡かい縫ぬひてわが汽車走る梅雨晴つゆばれの雲
さはなれや吉備の山山　若山牧水

逢(あ)う

あいたい【逢いたい】

あんたに逢ひたい粉炭(こなずみ)はじく　山頭火
逢ひたい、捨炭山(ぼたやま)が見えだした　山頭火
ふるつくふうふう逢ひたうなつた　山頭火
お座敷でなくぽつたりと途(みち)で逢いたい　英治
逢ひたさつのる夕べの陽(ひ)雪山に沁みる　裸木
逢ふもよし逢はぬもをかし若葉雨　久女
河原蓬(よもぎ)が枯れて逢はぬいくにち　一碧楼
会いに来てください明りが消えるから　みつ子[八]
あなたはきっと橋を渡って来てくれる　みつ子[八]
逢はぬ日はみそらの星のまたゝきも寂しく　矢澤孝子
みゆる白百合のまど
ながかりしわが世の日かず限りあれば会は
まくほしも野の明けくれに　片山広子
ほのかにも月あかりする部屋のさまうかべ
て急に逢ひたくなりぬ　百田楓花
偶然の逢ひも願ひて渡りゆく廊(ろう)に大時計
ゆるく鳴り出(いづ)　中城ふみ子
逢ひたやと泣く涙みな毒としもなりて我眼
のいたみ続くか　中城ふみ子

あいにゆく【逢いに行く】

試歩(しほ)したのし厨(くりや)の妻に逢ひにゆく　草城
ぽつかり月が、逢ひにゆく　山頭火
霙(みぞれ)る植最後のおもひ逢ひにゆく　しづ子
逢ひにゆく靴のいとしさよ鳥曇(とりくもり)　夢二
わが内より幼き少女脱(ぬ)けゆきて春の夕べ
を会ひたくてゆく　中城ふみ子

あいびき【逢引】

あひびきの少女とび出せり月夜の蟬　三鬼
霜夜逢へばいとしくて胸もとのさま　一碧楼
逢引の夕星(ゆうずつ)にして樹にかくれ　しづ子
あした逢う約束夜空が美しい　生門[八]
いそいそと広告灯も廻るなり春のみやこの
あひびきの時　北原白秋
野木(のぎ)ひともと梢(こずえ)あかるう暮れのこる
あひびきの子の唇(くちび)を吹く風　前田夕暮
満天にちらばる星に見入りぬる逢引の子の
悲しきわかれ　百田楓花
一時(ひとときの)逢ひに過ぎけりふと見やる暮靄
(ぼあい)のなかに散る桜ばな　岡本かの子
風つよき日の逢いにして夜のクロス切られ
ん髪の乱れしままに　岸上大作

あいみてのち【逢い見て後】

一(ひと)ここゑやあひみて後の時鳥(ほととぎす)　宗祇
逢ひし後胸ひろげ寝る夜の秋　桃里[八]

あいみる【相見る】

初雪の久住(くじゅう)と相見て高嶺(たかね)茶屋　久女
蝌蚪(かと)か黒し相逢ふ機会得て二人　香春[八]
相見ねば見む日をおもひ相見ては見ぬ日を
思ふさびしきこころ　若山牧水
身の中にアマリリスより紅(あか)き花咲かせて
二人相見しものを　与謝野晶子
会ひがたき人に見まゑえし倖(さいわい)の幾夜へ
だててまた思ひをり　入江章子[八]

あう【逢う】

七夕や髪ぬれしまま人に逢ふ　多佳子
相逢うて椿の下に憩(いこ)ひけり　泊月
夜は島をつつむ凩(こがら)死者に会ふ　肇[八]
何といふところか知らず思ひ入れば君に逢
ふ道うつくしきかな　山川登美子

あうよ【逢う夜】

あふ夜とてめでたき星の光かな　樗良[江]
音もせで逢ふ夜は雪の暖かき　鏡花
また更にあふべき夜半もあるものをなど死
ぬばかりつらき別われぞ　樋口一葉

おうせ【逢瀬】

くり舟の上の逢瀬は月のまへ　鳳作
手袋をぬぐ手ながむる逢瀬かな　草城
しばらくを遠ざかり居しこの逢瀬君はやさ
しく吾れつゝましき　矢澤孝子
宵の口ただひとときの逢瀬だにうれしきも
のか京に来ぬれば　吉井勇

かよう【通う】

水仙や素足すあしで通ふ長廊下　以楽[江]
W市へ小一里こいちりかよふ汗ばむ肌　しづ子
かよふ田はいづら稲妻いなずまおく露の光のほ
どもなき契ちぎりかな　樋口一葉
桜ちる月の上野をゆきかへり恋こひ通ひし
も六むとせ経にけり　伊藤左千夫

ほしあい【星合・星の恋・星祭・七夕】

逢う夜半やことしふたつの天あまつ星　宗祇
星合や名のみ七日の一夜妻いちやづま　宗祇
逢たがる星吹ふきよせよあまの川　蘆本[江]
星合やそろはで寝たる家の内　りん[江]
おもふこと人に書かせて星のこひ　一紅[江]
星達の契ちぎりのすゑや木々の露　白良[江]
灯ひを消してうす闇たのし星祭　淡路女
ねたましく仰ぎてまつる二星にせいかな　淡路女
うち曇る空のいづこに星の恋　久女
橋あらば渡りて行かむ銀河の夜　化石[八]
療者らの望郷讃歌星まつり　雄峰[八]

青い（あお）

あおあお【青青】

冬川に青々見ゆる水藻かな　鬼城
菩提子のあを〳〵としていとけなし　草城
行年や葱ねぎ青々とうら畠ばたけ　犀星

あおい【青い】

解とけて行ゆく物みな青しはるの雪　菊舎[江]
宿やどり木きのうとうと青し初時雨　六窓[江]
肩出して大根青し時雨雲しぐれぐも　普羅
酒くれし竹筒青し春の昼　露伴
御手洗みたらしの杓しゃくの柄え青し初詣　久女
初蟬はつぜみのおいとぼかりに松青し　紅葉
まつ青さおに鐘は響きぬ梅の花　茅舎
春雷しゅんらいや牡丹の蕾つぼみまつ蒼さおに　茅舎
空青し栗も青しよ山の国　トシ江[八]

あおいあさ【青い朝】

青の朝まばゆき虫と地に遊ぶ　三鬼
辻々の鋪石しきいしにしみた吐息などがぼやけて青いあかときとなる　明石海人

あおいあめ【青い雨】

杉山や夏うぐひすに青き雨　草城
塔中たっちゅうや額に青き雨落つる　三鬼
蝸牛ででむしやあをき雨ふる木槿垣むくげがき　古郷
みづからは半人半馬ばんじんはんばは降るものは珊瑚さんごの雨と碧瑠璃へきるりの雨　与謝野晶子

あおいうお【青い魚】

膝の上に真青まさおな魚がおちてゐる　赤黄男
わたる日のくるめき堕おちし簷のきふかく青き毒魚どくぎょをむしりて啖くらふ　明石海人

あおいかげ【青い影】

花李はなすもも美人の影の青きまで　鏡花
暮くれがたのうぐひす啼きてわが後あとに青き影這ふ月夜となりぬ　与謝野晶子

あおいひ【青い火】

鋼はがね断きる青き火ごとに裸形らぎょう群れ　桃史
山羊やぎひきて立てるメノコは野の草の青き炎に焼かるがに見ゆ　中城ふみ子

あおいひ【青い灯】

病む肩を起して見をり青き灯を連つらねしオートジャイロすぎゆく　相良宏
蛍光灯の青きしじまに人形らめもと笑えませて息する如し　中城ふみ子

あおいひ【青い陽】

空港の青き冬日に人あゆむ　三鬼
みくまのの山きはだちて青き日の水に船浮うけものを思へる　与謝野晶子

あおいめ【青い目】碧眼（へきがん）

枯園に聖母マメールの瞳め碧をたたへ　多佳子
何うつさむとするや碧眼万緑に　多佳子

あおいよる【青い夜】

巨おおきもの沼に潜ひそめり青の夜　三鬼
青の夜の銀笛きんてきの口醋すっぱけれ　三鬼
青き夜の来ること遅し水都祭すいとさい　草城

あおぎる【青ぎる】

ふかぶかと青ぎるみづにいつしかも雨の降り居るはあはれなるかも　斎藤茂吉
足元の雪にまどかなる月照れば青ぎる光ふみてかへるも　斎藤茂吉
色深み青ぎる滝つぼつくづくと立ちて吾が見る波のゆらぎを　伊藤左千夫

あおくなる【青くなる】

沼波の青沁むべしや施餓鬼幡せがきばた　多佳子
日かげりて輪飾わかざり青くなりにけり　草城
馬車ひとつ蹄音つまおとたてて過ぎ去れば毛欅ぶなのあかりの青くひろがる　与謝野晶子

あおぐらい【青暗い】

暈かさ帯おびて日は空にあり山山に風青暗し　若山牧水
ほととぎす啼く
棕櫚しゅろの葉がかすかに揺れて青暗しガラス戸のそといつぱいの秋日　片山広子
大ぞらに火を噴く山を見なれては蒼あおぐらきかな相模のやまやま　片山広子

あおさ【青さ】

簾戸すだ入れて我家のくらさ野の青さ　多佳子
青蚊帳に馬追うまおいが啼き青さちがふ　多佳子
冬銀河畑菜はたけなの青を感じつつ　良太
釣り上げしベラの青さや島の秋　梅星[八]

あおざめる【蒼ざめる】

髪はえて容顔ようがん蒼し五月雨さつきあめ　芭蕉
白きビル夕焼さめて蒼ざめぬ　草城
かみなりに魂とられ青ざめし女の顔にくちづけをする　近藤元
ゆくりなくかかるなげきをきくものか月蒼ざめて西よりのぼる　北原白秋

あおしば【青芝】

避暑の荘そう朝餉あさげの卓を青芝に　草城
もろともにあからさまなり青芝に　草城
しろき犬せなの巻毛のつややかに日に眠るかな芝も青みぬ　片山広子

あおじろい【青白い】

蒼白く夕かげりたる辛夷こぶしかな　花蓑
かたはらに昼の焚火の燃えしきりあをじろき汝ながはだへ なるかな　若山牧水

あおすすき【青芒】青薄

青芒三尺さんじゃくにして乱れけり　子規
青芒御空みそらは秋となりにけり　茅舎

あおすだれ【青簾】

その色にいつもあれかし青すだれ　吟松〔江〕
青簾かけてまたる、初音はつねかな　井月
雨を見る白き面輪おもわや青簾　草城
橋詰や数寄すきの小家こいえの青簾　小波
京の宿浪速なにわの宿や青すだれ　より江
吊り初ぞめの簾のうちにしばらくは　しづ子

あおとかげ【青蜥蜴】

青蜥蜴吾ゆかねば墓ひき乾きをらむ　多佳子
泉に入れ胸腹熱き碧蜥蜴あおとかげ　多佳子

あおむ【青む】

門先かどさきや猫の寝る程草青む　一茶
きびしき春を山吹の茎青みゆく　民喜
陽ひあたりは移りつくして紙障子ほの青み　明石海人
つつ冷えのさしそふ　若山牧水
たぎち落つる真白き水のくるめきのそこひ
青めり春の日なたに　若山牧水

あさがおのあい【朝顔の藍】

この頃の葬あがおの藍に定まりぬ　子規
あさがほの藍のうすきが唯一つ縋すがりてさ　長塚節
びし小雨さへふり

うすあお【薄青】

葭よしの江のうすうす青き団扇うちわかな　鳳作
薄青きかなしみ我われす夜よるごとにすいつち
よの啼く秋の来きたれば　与謝野晶子

うみあおし【海青し】蒼海そうかい

花の坂船現はれて海蒼あおし　久女
隔たれば枯木は湖うみの碧あおに消ゆ　草城
松よりも海の碧さや弥生尽やよいじん　碧雲居
大年おおどしの蒼海ちかく住みにけり　石鼎

片頬にひたと蒼海あおみの藍あいと北風きた　しづの女
海の藍あいざぼんの緑赤とんぼ　蛇笏
極月の白昼まひる艶えんたるは海の藍　蛇笏
吾子あこ征ゆきしままの冬海深藍インジゴオ　長風〔八〕
踏青とうせいや海より碧き吾が心　前田夕暮
青黒い水晶体を湛たへて、底ふかく日を浸
透する然別しかりべつ　伊藤左千夫
はてしらぬ地底ちのそこに通ふ瑠璃るりの海世
にか、はらぬ其その水の色　三鬼
風青し古うぐいすの歎きぶし　片山広子
本町の彼かの病院の窓の内に燕よはこべ野
の青き風　普羅

しおあおし【潮青し】

玄海に花屑魚かなぎ育てて碧あおき潮　普羅
潮蒼く人流れじと泳ぎけり　子規
釣堀の日蔭の下の潮青し　余子
島蔭しまかげの春潮青きところかな　晩台〔江〕

そうてん【蒼天】

蒼天に河辺の蘆あしの枯れ葉かな　普羅
茅枯れてみづがき山は蒼天そらに入る　草城
七月の蒼天を飛ぶ人見ゆる　蛇笏
蒼天の一刷ひとはけの雲冬嵐　石鼎
蟻土に今碧天へきてんを烏からすとぶ

そらあおし【空青し】

浅黄空あさぎぞらほうとばかりも鶯ぞ　一茶
あつさりと春は来にけり浅黄空　一茶
青空のきれい過すぎたる夜寒よさむ哉　一茶
涼しさや藍あいよりもこき門かどの空　一茶
冬滝の天ぽつかりと青を見す　多佳子
こほれたる霰あられの空のあをかりき　古郷

一霰ひとあられこぼして青し松の空　石鼎
時雨しぐる、や空の青さをとぶ鴉からす　石鼎
芥子咲けば碧あおき空さへ病みぬべし　鳳作
枯銀杏空のあをさの染しむばかり　しづの女
風花かざはなの御空のあをさまさりけり　秀野
水馬みずすまし青天井をりん〳〵と　茅舎
瑠璃色るりいろの空を控へて岡の梅　淑石
刈られずに花となる雑草触さわりつつ空青き
日に生くるは楽し　島秋人

つきあおし【月青し】

月青しかたき眠りのあぶれもの　鳳作
風鈴に青い月射さし人もねず　貢太郎
児童等はうしほに濡れてかへり来ぬ漁師の
町の青き月夜を　森園天涙
夜の更ふけの警備の兵の着剣ちゃっけんを青く
てらすはタングステンの月　小熊秀雄

みずあおし【水青し】

寒かんの水あをあをとして吉野川　草城
水青し土橋どばしの上に積つもる雪　淑石
上水じょうすいが青貝色あおがいいろに流れたり武
蔵のさくら散りまがふなか　与謝野晶子
乗鞍のりくらの三つ立つ峰のふところに湛たた
へて蒼あおき水のある見ぬ　窪田空穂

むぎあおし【麦青し】

麦あを〳〵と菜種まばゆき　几董〔江〕
ざざざざと砂を天降あもらせ麦の青　純夫
麦青くのびつつ村はほそき雨　素逝

やまあおし【山青し】

雁ゆきてべつとりあをき春の嶺みね　蛇笏
火祭ひまつりのその夜の野山月に青し　多佳子
大阿蘇の波なす青野夜もあをき　多佳子
山青しかえるでの花ちりみだり　不器男

奪われる

いきわかれる【生き別れる】

訣別や手折たおりし野菊高く投げ　兎月[△]
かけよりて袷あわせのしつけ取られけり　兎月[△]
骨肉こつにく離散冬の銀河の尾短かし　節子[△]
星とんで生き別れした過去淋し　詩愁[△]
逢える日を祈りつゞけるせみしぐれ　一歩[△]
枯菊に永遠とこの別離の妻と佇たつ　正秋[△]
思い出をつなげば母の手にひかれ　とき子[△]
母背負せおひ泣いた詩人が羨うらやまし　洋介[△]
正月と盆との会いを重ね来て六年むとせは過ぎぬ我と吾が妻　一柳鈴吉[△]

こにいきわかれる【子に生き別れる】

笑ふ児こを抱いだかで別る花八つ手　涙光[△]
吾子おくりかへして梅にまた独ひとり　雨江[△]
生きてゐてくれと去る娘こや枯野駅　雄峰[△]
縋すがりつく手をころげたる蜜柑かな　梯梧[△]
母知らぬ児に廻りをり走馬灯そうまとう　薫水[△]
凧たこ一つ残し面会の子の帰る　靖子[△]
束つかの間まを乳ふくませて別れにき侘わびしくも吾あの乳房ちふさ老いたり　山下初子[△]
笛付ふえつきの乳首吸ひつつ眠る児を置き去り来し遠き日の夜半　美園千里[△]
幾年いくとせを忘るること無きおかつぱの吾子の姿の胸に育つも　村山義朗[△]
親子連れ逃走せしは孤児院へ子を送らるる前の夜なりし　木村美村[△]

かくり【隔離】

負おはれ来る収容の子に雁かり高く　灯子[△]
巣立燕無門無柵の空があり　葦雄[△]
これからは出られぬ径みちや蓮花草　ふさを[△]
叔父甥の同じ病の蚊帳かな　兎月[△]
泣きじゃくる手をいたはりぬ蚊帳の中　兎月[△]
枯木立つ奪はるるもの奪はれて　孝[△]
末枯うらがれに隔離舎の堤高きかな　孝[△]
蛞蝓なめくじの道程光り隔離の塀　斗象[△]
昭和十五年艀はしけにて渡りし夜の灯ひの輝く　大津哲緒[△]
関門海峡美しかりき　宿里禮子[△]
療養所につれ行かるとも知らずして弟は汽車の旅をよろこぶ　深川徹[△]
四十年過ぎて尚なお心しづかに語り得ず強制収容されし日のこと　荒木未子[△]

がいしゅつきょかしょう【外出許可証】

卯の花や一夜かぎりの外出証　武雄[△]
帯に汗たまる外出証秘して　敬子[△]
野火の香に罪人めきし外出そとでかな　敬子[△]
一泊の仮退院や年の暮　良一[△]
外出許可証をもておどおどと夜汽車をえらび帰り来にけり　深川徹[△]
蔦つたの葉の深深ふかふかと覆おおふ塀の下無断外出罪令状を吾によむ巡視長　荒木未子[△]
園外に出づれば法は容赦なく君に手錠をがつしりとかく　甲斐駒雄[△]
鞭むちち打たれ血を吐きて土に伏したりき無断外出を問とはれし患者　木谷花夫[△]

なをすてる【名を捨てる】

仮の名で通す一生石蕗つわの花　花芙蓉[△]
骨壺に書きしも偽名春寒し　葦雄[△]
韓国の君を葬ほうむる日本名　秋夫[△]
親の名を砂に書く子に棟おうち散る　松籟[△]
父母ちちははのえらび給ひし名をすててこの島の院に棲すむべくは来ぬ　明石海人

りせき【離籍】

離籍さる空なしく翅はね打つ梅雨の蝶　孝[△]
籠枕かごまくらかなしき離籍して安堵　愛子[△]
この海に育ちて病みて離さかりたる町にし残る一人の戸籍　大津哲緒[△]
廃嫡はいちゃくの手続き済みてぽつねんと孤独の未来考へてゐる　秋葉穂積[△]
除籍すれど汝なれは吾が子ぞこの我を忘るなゆめと母の文ふみ来ぬ　北千鶴雄[△]

だんしゅ【断種】

実梅掌てに断種の時刻せまり来る　自然坊[△]
断種了おふ天に自由のつばくらめ　一衛[△]
断種へのさかまく想おもい海荒れる　秋夫[△]
父となること赦ゆるされず精管を断たつといふなる今朝の手術室　長瀬実津緒[△]

こをうばわれる【子を奪われる】中絶

水子地蔵女だまって水かける　みつ子[△]
雛あられふふみ子無きをもう嘆かず　房枝[△]
病める身を諾うべなひて神に縋すがるわが妻に身ごもる子をおろさせぬ　伊藤保[△]
生むことを許されざりし子を思ひ水子不動に水をかけやる　岩本妙子[△]
水潜くぐる童のあなうらが白白しらじらとただにあはれに水を蹴りつつ　浅野繁[△]
傷つきし心の癒ゆる時の無し中絶の子が夢に生きゐて　笠居誠一[△]
中絶の子はまぼろしのなかに育ち馳かけもどりくる春の渚より　朝滋夫[△]
その名さへ付けざるままに死なしめし嬰児みどりこを恋こふ立春りっしゅんいまは　朝滋夫[△]
次の世にいのちゆたけきをみなにていく人もいく人も吾は生みたし　津田治子[△]

食す（しょく）

おす【食す】

山ごもる大和は遠し目刺めざし食す　秀野
酒にがくなりてさびしやただひとり島辺の宿に蛸たこの飯いい食おす　吉井勇
魚市うおいちの籠かごの中に跳ねまはり居いし蝦えびを朝見て昼は食しにけり　植松壽樹

かぶりつく

目の前でかぶりつきたる大根だいこかな　惟然[江]
かぶりつきぬ白桃すいみつ葡萄梨ありのみに　石鼎

くう【食う】

何喰くうて居るかもしらじかんこ鳥　蕪村
牛馬うしうまの物喰ふ音や民の春　蓼太[江]
人の茶でけふも物食ふさくらかな　文暁[江]
ひとつ鍋のものくふ友よ夜はまぐり　田女[江]
芋喰つて生きて居るわれハ芋の化物　汝哉
芋食うてよく孕はらむなり宿の妻　鬼城
物くへば夜半にも残る暑あつさかな　荷風
にはとりの雛ひなにやりたる菜の一把いちわ見つつ立つ間に食ひつくしけり　宇津野研

くちにはこぶ【口に運ぶ】

麹こうじ干しつつ口にも運ぶ旧街道　三鬼
地より口へ苺運び働きに出る　三鬼
氷菓ひょうかすくふ匙さじひらひらと口に運びしばしのわれを甘やかしたり　中城ふみ子

くらう【食らう】

大菜小菜おおなこなくらふ側から花さきぬ　一茶
臀しりたれてむだ飯めしくらふ秋の猫　蛇笏
寒鮒かんぶなの肉をそとほしみ箸はしをもて梳すきつつ食らふ楽しかりけり　島木赤彦

たうぶ【食うぶ】

寒のつくしたうべて風雅ふうが菩薩かな　茅舎
桜餅葉を重ねつ、食うべけり　碧童
日にぞ浮く菖蒲のかこむおばしまにちまきたうべし紅べにの口つき　片山広子
白き気けの立てる白粥食うべをり身に沁みて吹くつゆの風かな　宇津野研

たべさせてもらう【食べさせてもらう】

食べさせてもらふ口あけ日脚ひあし伸ぶ　草城
高窓より雪の散りきぬ妻が匙にてふくます
飯に口開きをれば　伊藤保[八]

はしをおろす【箸を下ろす】

煮凝にごりにまづ一箸ひとはしを下しけり　万太郎
友くるや夜食の箸をおろすとき　禅寺洞
晩おそて秋の箸をつけざる旅の膳　しづ子

はなをくう【花を食う】

やさしきは花くはへたる池の亀　言水[江]
朝顔をその子にやるなくらふもの　荷兮[江]
をみなへし馬一口ひとくちに食ってけり　江鳥[江]
わが馬の歩み自おのずから止とまりて野中の萩はぎの花喰ひにけり　島木赤彦
家鴨あひるらに食はみ残されしダアリアは暴風あらしの中に伏しにけるかも　斎藤茂吉
軽戦車重戦車など遠ざかり花びらを啖くふ小犬と私　明石海人
薄月夜うすづくよこよひひそかに海鳥うみどりがこの丘の花をついばみに来こむ　岡本かの子

はむ【食む】

猫のゐてペン〳〵草を食みにけり　鬼城
草喰む猫眼うとく日照雨そばさ仰ぎけり　蛇笏
名は知らね大山祇おおやまつみもたうべます霊
薬くすりとして山草を食む　吉井勇

襖ふすまには猫の物食む大きかげ夜寒よさむひ
そかに吾れも食みをる　北原白秋
白芥子しらげしの芽も葉も茎も食みつくす寺の
小矮鶏こちゃぼの追へどまた来る　北原白秋

むさぼりくう【むさぼり食う】

炎天、がつがつ食べるは豚　山頭火
生木よりちぎりむさぼる蜜柑の肉　多佳子
父病むときくのみさくらんぼむさぼり食ふ
梵字[八]

ひたむきに箸はしを動かす長屋ながやの子時を
り打ふたるむさぼりくらへば　北原白秋

めしをくう【飯を食う】

さく〳〵と飯くふ上をとぶ蛍　一茶
行灯あんどんで飯くふ人やかへる雁かり　一茶
さむしろや飯喰ふ上の天の川　樗堂[江]
端近はしちかに飯食ふ人や青簾あおすだれ　紅葉
減塩食に慣れ一人居の秋深む　恵哉[八]
恋人の食べ残したる皿の菜が寂しき予測生
みて夜深し　中城ふみ子

やけぐい【やけ食い】

愛いとしさや恋負け猫が食めし欲ほれり　多佳子
忽たちまちに食ひし寒餅五六片　草城
失恋の果はてを河豚ふ食ふ男かな　綺堂

ゆきをたべる【雪を食べる】雪を食はむ

かりかりと柴の雪たぶ炉ばたかな　蛇笏
稚おさなき日の雪の降れ、ば雪を食べ　鳳作
熱落ちて嚙む淡雪あわゆきのうまさかな　零余子
雪つまんでは子も親も食べ　山頭火
残雪を喰はみつつ越ゆる冬山の日の照るか
たに咲く椿かな　岩谷莫哀
首出して神馬しんめ雪喰くふつつましさ見て通
りけり朝の帰りに　北原白秋

手（て）

おとこのて【男の手】男手（おとこで）

雪こんこん死びとの如き男の手　しづ子
男手の瓜揉（うりもみ）親子三人（みたり）かな　秀野
置炬燵（おきごたつ）男は手から年がよる　夢二
地平線汚血したたる男の手　赤黄男

おんなのて【女の手】女手（おんなで）

月を病む女のしろき掌（て）の葡萄　赤黄男
竹夫人（ちくふじん）抱く女の手のしろき　荷風
つれづれの手の美しき火桶（ひおけ）かな　草城
笹鳴（ささなき）や火桶にかゝる女の手　草城
女手に注連飾（しめかざり）打つ音きこゆ　草城
女の手に空蟬（うつせみ）だけゆきにけり　三鬼
青柿の堅さ女の手にすわる　三鬼

しもん【指紋】

寒さむざむと指紋とらるる指伏せけり　しづ子
冬の蠅（はえ）指紋崩（くず）れし指なめる　求[八]
やはらかき渦の流れてゐたりける指紋を消して麻痺ふかく入いる　津田治子[八]

たなごころ【掌】

桑の実やそゞろありきの掌　小波
涼しさや石握り見る掌　漱石
麻痺の手を胸に温め眠る夜かなしき癖のつきし思ひに　宿里禮子[八]

つめ【爪】

深爪（ふかづめ）に風のさはるや今朝の秋　木因[江]
工場出る爪むらさきに秋の暮　三鬼
爪半月（はんげつ）なき手を小公園に垂れ淋しいからだから爪がのび出す　三鬼
月待つや指さし入いる温泉（ゆ）の流　放哉

つめをきる【爪を切る】

深爪（ふかづめ）に風のさはるや今朝の秋　木因[江]
かたちよく爪をきりとるむつきの日　しづ子
つぎ〳〵に子の爪切りぬ夕端居（ゆうはしい）　月斗
縁側に足の爪を剪（きる）る沈丁花　夢二
春の夜の足の爪剪る女かな　草城
切らざりし二十の爪と除夜眠る　三鬼
湯上りの爪剪る先や雲の峰　英治
薫風（くんぷう）や病よき日の爪を切る　虹児[八]
爪切りに廻る看護婦春日和　春草[八]
爪を切りつつ幾たびも鋏（はさみ）とり落（おとし）どうにもならぬ限界にゐる　千葉修[八]

てのこう【手の甲】

手の甲や茗荷の花のむつくらと　白雪[江]
剃刀（かみそり）にふれて吾が手の甲の血をふけど麻痺したる手の痛みなかりし　田原浩[八]

てをあげる【手を上げる】

手を上（あげ）てうたれぬ猫の夫かな　智月[江]
ゆく船へ蟹はかひなき手をあぐる　赤黄男

てをひらく【掌を開く】

いつぽんの枯木へひらく巨（おお）きな掌　赤黄男
真白き掌火鉢（ひばち）の縁（ふち）に君ひらく　良太
淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る　放哉

ふしだか【節高】

節くれの指いよいよ太し啄木忌　東海子[八]
節高き男の手して飼はれたる蚕この繭（まゅ）とし也見えぬ優しさ　岡本かの子
野良仕事（のらしごと）する友ふしくれし手で朝の汁作りおりキャンプの朝　岸上大作

ゆび【指】

をさなごのひとさしゆびにかゝる虹　草城
汗ばみて指美しや野蒜籠（のびるかご）　秀野
月待つや指さし入いる温泉（ゆ）の流　たかし
子爪（こづめ）このごろ親指にのみ秋の風　亜浪
小指より繊（ほそ）き真（まこ）たばこや菊の露　草城
露の秋無名指（ななしおよび）を愛しけり　槐太
かはいや小さくても赤い蟹の親ゆび　放哉
子の指先弥次郎兵衛（やじろべえ）立つ大枯野　三鬼
妻と雪籠（ゆきごも）りして絵の具とく指　碧梧桐
白魚の如き指なり毛糸編む　清[八]
石鹸が逃げる一節（ひとふし）だけの指　苔華[八]
くすり指に十年（とせ）見馴れし指輪さへ透すかしてそ見る湯にひたりつゝ　片山広子

ゆびえくぼ【指笑窪】

枯山に日はじわじわと指えくぼ　三鬼
うなゐ児（ご）のまろき柔手（やわて）の指ゑくぼ触れじとするも豈（あに）堪（たへ）めやも　木下利玄

ゆびさす【指さす】

の、さまと指（ゆび）さした月出たりけり　一茶
負（おう）た子が先へ指さすわかなかな　一茶
炎天の北斗ゆびさす巌（いわお）かな　暁台[江]
指さしてのびする児（ちご）の月見かな　智月[江]
ひとつ星など指（ゆび）さして門（かど）すゞみ　井月
いつまで何を指さす病者春夕べ　三鬼
少女指せば昼月ありぬ春の終　三鬼
遠き海夏手套（なつてぶくろ）に指（さ）されたる　夕爾
月を指さす幼児（おさなご）ゆゑにあはれとはいみじかりけることを言ひつる　北原白秋

りょうて【両手】双手（もろて）

両の手に桃とさくらや草の餅　芭蕉
紙風船ふくらんだかたちの小さな両掌　裸木
竜胆（りんどう）も鯨も摑（つか）むわが双手　久女
両方の手にさげてゐる鰹（かつお）かな　初霜[八]
縫ひたての座布団たまひぬ幼児（おさなご）の夜具
地（ぢ）やくしと云ふに双掌（もろて）這はする　島秋人

逝きし子

このし【子の死】

名月や膳に這はいよる子があらば　一茶
最もう一度せめて目を明あけ雑煮膳　一茶
露の世は露の世ながらさりながら　一茶
夜の鶴つる土に布団も着せられず　其角[江]
春の夢気の違はぬがうらめしい　来山[江]
赤ん坊ひと晩で死んでしまつた　放哉
子の死後も糸瓜の水を取りきれず　麦草
ふた親のなみだに死ぬ子明け易やすし　蛇笏
幼子おさなこの死に雲ふかし蕎葉降る　蛇笏
二三ふたみこゑいまはのきはに微かすかにも泣きしといふになみだ誘はる　石川啄木
人の世にしばしとてこそ生うまれけめ雲井のよその神のみどり子こ　金子薫園
むらぎもの心しづまりて聞くものかわれの子どもの息終いきおわるおとを　島木赤彦
硝子戸ガラスどの外とのもに星は照り満てりたちまちにして我が子はあらぬ　島木赤彦
野の風の雪をもたらし更ふけ沈む夜をひそやかに死にてゆきけむ　石井直三郎

このしにがお【子の死顔】

顔のうへに涙おとさじとおもひたりひたぶるに守もる目をまたたかず　島木赤彦
ひたすらに面おもわをまもれり悲しみの心しばらく我におこらず　島木赤彦
国遠くもちてかへりぬ画えだくみがかきてたびたる吾が子の面おもわを　島木赤彦

こをほうむる【子を葬る】

子の葬はふり子おへ来し人と青き踏む　さかえ
かなし児は祖先の墓のかたはらにかなしかれども眠らせにけり　古泉千樫
葬はふりはて人おのがじしかへれども吾子のかへらん時あらめやも　木下利玄
ちひさなる生命いのちをほふり日々にちちに喰べてけるかと今さらおどろく　岡本かの子

たいじのし【胎児の死】誕生死たんしょうし

卯月八日死んで生まるゝ子は仏ほとけ　蕪村
今の世になかぬ産子うぶこの仏ほとけ哉　乙州[江]
血に染める小ちさき双手もろでに死にし児がねむたき母の目の皮を剝はぐ　与謝野晶子
わが妻の胎児の呼吸いきのきこえずとひそかにいふにおどろきやまず　前田夕暮
死にしか死にしか否か死にしかわが胎児呼吸せぬといふにせんすべもなし　前田夕暮
死にし児をみごもりてあるわが妻の心をおもひねがへりにけり　前田夕暮
友の児は皆こころよく生れしにわが児死にけり何の因果ぞ　前田夕暮
いかにして児は死ににけむ夜を一夜そのよりて来し過ぎし日おもふ　前田夕暮

なきがらをだく【亡骸を抱く】

しみじみとはじめて吾子をいだきたり亡きがらを今しみじみ抱きたり　古泉千樫
夜おそくつとめ先よりかへり来て今死にしてふ児を抱けるかな　石川啄木
かなしくも夜明くるまでは残りゐぬ息きれし児この肌のぬくもり　石川啄木
かなしみの強くいたらぬさびしさよわが児のからだ冷えてゆけども　石川啄木
亡きがらを一夜ひとよ抱いだきて寝しこともなほ飽あき足らず永久とわに思はむ　島木赤彦

ちさきひつぎ【小さき柩】

棺かんあまり小さし海うみ南風はえに待つ　三鬼
柩かろくて朝のたうきびの毛　一石路
あはれにも母の命に代かわる児を器の如く木の箱に入いる　与謝野晶子
かなし子を柩に入れてなごりぞとながめし時の君をこそおもへ　金子薫園
小ちさき旗ちさき柩のうしろよりしたがひ行くようなゐ子のむれ　金子薫園
ふるさとに久ひさにてかへるかなし児の柩いだきて今はも帰る　古泉千樫
抱いだきゆく小さき柩にふるさとの朝日ほのぼのと流らふるなり　古泉千樫
今はもよ小さき柩のなくなりし家ぬちに来てひとりすわれる　古泉千樫

ゆきしこ【逝きし子】

逝きし児を生き残る我をなげくかな　白雄[江]
手花火の闇の奥より亡き子来る　信夫[八]
おそ秋の空気を三尺さんじゃく四方しほうばかり吸ひてわが児この死にゆきしかな　石川啄木
泣きて泣きて泣きてすむべき事ならずあたら男おの子をあだに死なせつ　尾上柴舟
「なぜか思ふとく忘れよ」とわが心叱り足らずて妻を叱りつ　尾上柴舟
旅にして逝かせたる子を忘れめや年は六むとせとなりにけるかな　島木赤彦
ここの襖ふすまそこの障子をひらけども逝きし子はまた見るすべもなし　石井直三郎
垂髪たれがみのまだ短くて逝きし子におもひつきせぬ人のこころや　高田浪吉
清香せいこう無邪気とそ花ことばのフリージア供え幼く逝きし子の年を数かぞう　斎藤アキ代[八]

ゆ